

大学生を対象とした 主要 5 因子性格検査による再検査効果の検討

横 井 大 和

Windle は統制群を設けずに行っている研究を調査し、検査を繰り返すだけで結果が変動することを見出し、これを再検査効果 (test-retest effect) と呼んだ。日本での再検査効果の研究では、速水は 2 度目の結果がより適応的なものに変動すること、検査内の尺度毎に変動の大きさが異なること、年齢が大きくなるにつれ変動が小さくなると指摘している。長谷川は、再検査効果が約一ヶ月の間隔で生じやすいこと、自己評価の高低によって変更する回答が違ふこと、項目の記憶と再検査効果に関連がないこと等が見出した。しかし変動の一貫性や生起する条件が明確にならないまま研究は途絶えている。また、研究の初期に用いられた YG 性格検査は信頼性に問題があり、検査結果が変動しやすい可能性がある。よって今回は、信頼性・妥当性ともに高い主要 5 因子性性格検査を用いて、再検査効果についての検討を行った。

大学生の男性 52 名、女性 39 名の計 91 名に、主要 5 因子性格検査を施行し、検査間隔は 1 カ月とした。結果、平均の比較で有意な差が見られたのは全体の O のみであった。再検査信頼性と相関係数を比較すると、男性・女性ともに低い傾向が見られた。また N 以外の項目では男性の方が再検査信頼性と相関係数の差が大きく、相関係数は全ての尺度で男性の方が女性より低い傾向が見られた。内部一致性の変化をみると、全体では E、Att、C、N、O の 5 項目、男性では Att、E、A、C、N、O の 6 項目、女性では E、A、N、O の 4 項目で α 係数が高い傾向が見られた。

今回の調査では、再検査効果の詳細な生起や方向、性差や尺度毎の様相を確認することはできなかった。研究協力者を募ることが難しかったためにサンプル数が少ないことも有意な差を見いだせなかった原因かもしれない。また、これまでの再検査効果の研究を確認すると、YG 性格検査には信頼性、妥当性の問題があった。これは当時としては問題のなかった性格検査であり、しかし二回目の検査結果は変動しやすい可能性がある。そして結果が変わりやすいということは再検査効果として見られている結果にも偽りの変動が起こっている可能性がある。年齢ごとの比較を行った際にも変動の方向が完全に一致はしなかったことから、検査自体の結果の変動性が高かった可能性はあると考えられる。さらに YG 性格検査以外に用いられた自己評価的意識尺度などは 3 件法以上の質問紙である。こうした質問紙は、被験者が回答する際に自己を相対的に評価する事になる。評価を二回目に変動させることは、2 件法で回答を変更するほど劇的には変わらない可能性があるかもしれない。2 件法でなくとも今回用いた主要 5 因子性格検査のように、近年の厳しく制定された方法に則って製作された性格検査であれば、これまでの再検査効果生起されない可能性がある。再検査効果そのものの有無も含めて、今後の研究が期待される。